

# 釧路新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

■上■

財団法人釧路新郷土芸術振興基金（春日井茂理事長）は2006年度（第35回）「釧路新郷土芸術賞」受賞者を決定した。独創的な抽象画を作风に若手ホープと期待される釧路市愛国西、向中野るみ子氏（26）、かなの世界に魅入られ、雅な「かな」を書き続ける同市鶴ヶ袋、広部翠月氏（61）、特別功労賞として釧路の文学同人誌「北海文学」を長年主宰し、今年5月に死去した故鳥居省三氏と決まった。受賞者の横顔を紹介する。

若手ホープと期待

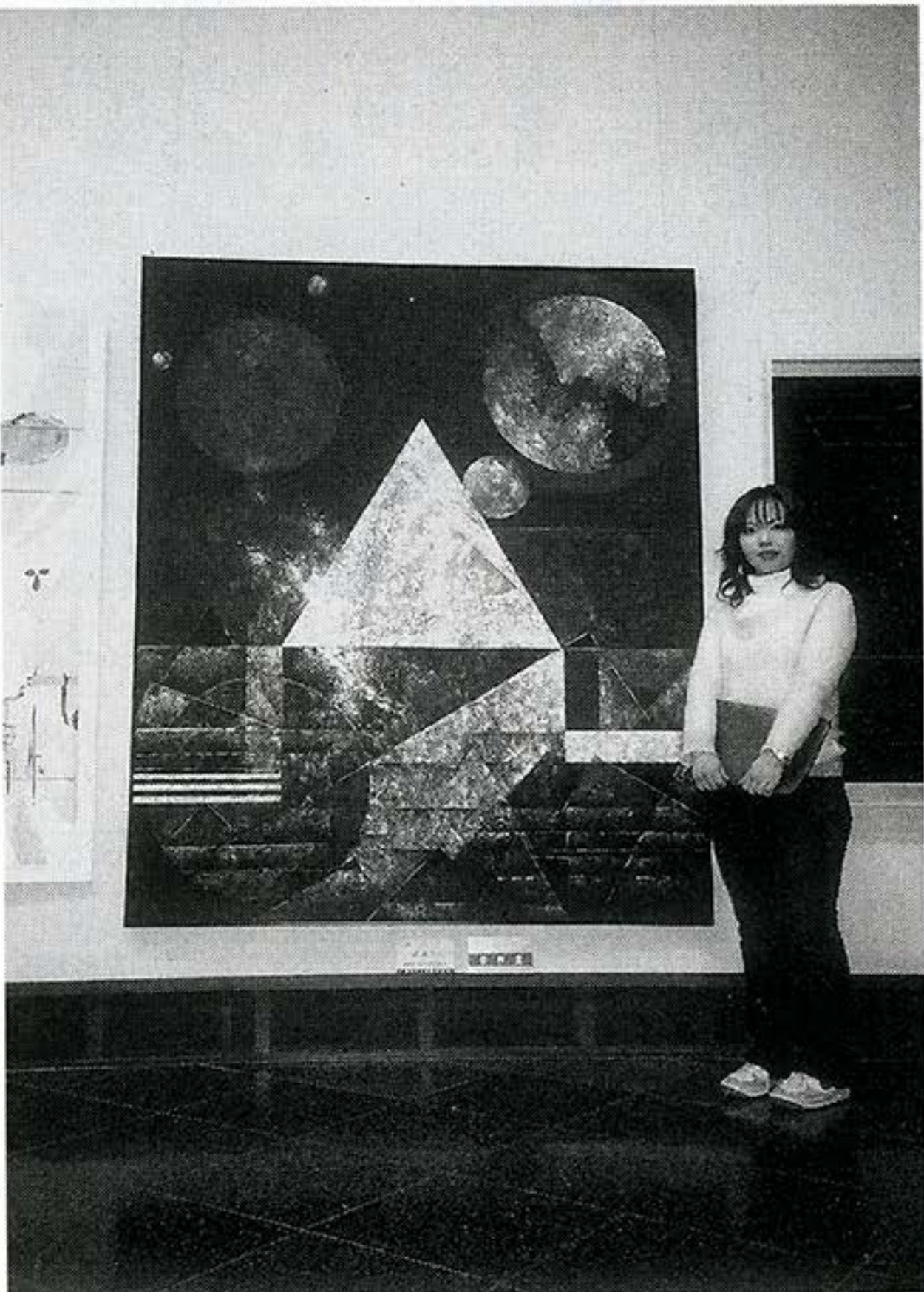
独創的な抽象画で今年度、道東を代表する釧路

展会員と道展会友に26歳 科在学の2001、02年の若さで推挙された向中野さん。講評で「男性的」ともいわれる力強い作风 美展協会賞に選ばれた。で、若手のホープと期待 受賞作「記憶Ⅰ」は、全体は茶の濃淡で円や三角、道展には大谷短大美術 四角形を描き、中央に金

## 油彩画

向中野るみ子さん（26）

（釧路市愛国西）



## 抽象画の魅力「自由にできる」

「気持ちに素直」を大切に創作

箔（きんぱく）を張ったような黄金に輝く正三角形を配したアクリル画。最も大切にしたのは「光」。アクリル絵具のみを使用

には絵を描いていた。当時、芸術家岡本太郎が子供たちの絵を評するテレビ番組の影響で絵を描き始めた。高校で美術部に入部。静物画、立体などに取り組むうち「自由にできて比べるものがない」と抽象画の魅力に引きつけられた。「絵は感情がストリートに表れる。さまざま感情を形に変え、頭の中でパズルのように組み合わせている」と向中野さん。「見る人それぞれが自由に考えてほしい」と作品に込めた思いの多くは語らない。

来釧4年目。昨年度から、念願の美術科教諭として釧路町立富原中に勤務する。今年7月に結婚。夫は就職が決まるまで経済的に苦しかった時期も、道展に落選した年も「描き続けなきゃだめだ」と支えてくれた大切なパートナーだ。

「釧路で絵の仲間が増えた。いつかは個展を開きたい」。各展受賞後のプレッシャーも感じるが「無の状態で、描きたいという気持ちに素直に従う」ことを大切に創作を続ける。

ものびんこいたころ

（河辺由記子）